



河北新報は戦後80年の今年、自社で収蔵する白黒写真のカラー化に取り組む。専門家、戦災経験者、地元大学生らの協力を得ながらデジタル技術を用いて彩色。リアリティーを増した写真の力で風化にあらがひ、不戦の誓いを新たにす。
(せんだい情報部・桜田賢一、編集部・吉江圭介)



①AI技術でカラー化された
仙台空襲の写真。炎と煙が市
街地を包む②当時の白黒写真



河北新報新プロジェクト 戦災写真、AIでカラー化

リアルな色風化にあらがう

第1弾は1945年7月10日未明の仙台空襲を捉えた1枚。仙台市青葉区五橋にある河北新報社の当時の社屋屋上から、北側の青葉区中央方面を写した。

色彩を得たことで、米軍爆撃機B29による焼夷弾の攻撃を受け、市街地から激しい炎や煙が上がる様子が鮮明に浮かんできた。空の状況から夜間とみられ、建物や電柱、樹木のようなものが確認できた。カラー化のプロジェクトは、画像のカラー化を数多く手がけてきた佐藤正実さん(60)が協力。色合いを確認しながら仕上げていく。

市街地焼く炎鮮明に

当時、市中心部に住んでいた堀江さんは「北へ走って逃げた。後に兵隊さんから『空襲で地上の温度は1000度まで上がった』と聞いた」と回顧。千葉さんは「仙台空襲直後の写真は極めて珍しい。色が加わると炎のリアリティーがある」と評価した。

プロジェクトには戦災の記憶を次代に伝承する狙いから宮城学院女子大(青葉区)の学生も参加。渡辺教授の指導を受けながら彩色を担う。

取り組みについて加藤さんは「戦前から戦後のカラー写真は一部に限られ、カラー再現は意義がある」と強調。中島さんは「若い人にとっても、同じ世界の出来事として受け止められるのではないか」と期待する。